

最終回 対談「連載をめぐって②」

順天堂大学名誉教授・広島国際大学客員教授
日本ヘルスプロモーション学会会長
日本HPHネットワークCEO

島内 憲夫・鈴木 美奈子

島内：今回で「WHOヘルスプロモーションとは何か？」の連載は最後になりますが、最後は私の教え子でもある順天堂大学国際教養学部准教授の鈴木美奈子先生との対談を企画致しました。鈴木先生とは、2005年にタイのバンコクで開催された「WHOヘルスプロモーションに関するグローバル会議」にWHOから招待され一緒に参加してきました。詳細は、島内憲夫・鈴木美奈子著『ヘルスプロモーション～WHO：バンコク憲章～』（垣内出版、2012）に記載していますので、お読みいただきたいと思います（写真）。

では鈴木先生、対談を始めたいと思います。まず、「WHOヘルスプロモーションとは何か？」の第1回から第10回までの私の連載を読んで、感じたことや印象に残ったことについて、語っていただけますか。

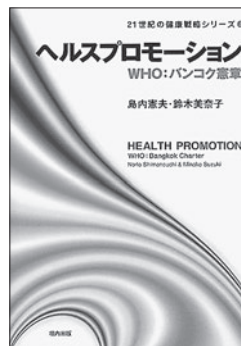
鈴木：はじめに、島内先生、このたびは対談という形で声掛けくださりまして、ありがとうございます。10回の連載を拝読し、率直な感想といたしましては、「島内ワールド」と申し上げてよいのでしょうか……。ヘルスプロモーションそのものの知識や情報もさることながら、先生の思考やお人柄も感じられる連載だなと感じました。特に私個人としましてはやはり「健康」や「幸せ」とヘルスプロモーションとの関連についての部分は印象深いですね。哲学的なテーマでもありますが、ヘルスプロモーションを実践する際には大変重要なキーワードになると日々感じております。先生が送られるメッセージには、専門的な知識やエビデンスのみならず、学問との関連、研究背景や社会性、人間模様が描かれるところが魅力だと感じております。「専門職のみならず地域の人びと（生活者）の顔が見えなければヘルスプロモーション

とは言えない！」とよくおっしゃっていましたが、専門職はもちろん、地域の人々にも届けることを意識したメッセージは重要だなとあらためて感じました。

島内：どうもありがとうございました。いろいろ感じてくださったのですね。今

度は、WHOヘルスプロモーションの概念や戦略について、一緒に日本の津々浦々に広げてきましたが、鈴木先生にとって、「WHOヘルスプロモーションとは何ですか？」と尋ねられたら、どのように答えますか？

鈴木：これはシンプルに大変難しい質問ですよ！私が先生に質問したいくらいです（笑）。個人的には「あらゆる人々が、自分のなかにある『健康的な部分、を生かしてより豊かで幸せな明日をめざす活動』と答えます。かなり抽象的ですが……。そのうえでより具体的な健康戦略として「健康生活の習慣づくり」と「健康生活の環境づくり」の双方のアプローチの重要性を語るようにしています。専門書や教科書ではヘルスプロモーションの定義や説明はあっても、本来のねらいやこの戦略がつけられた背景はほとんど描かれていません。そのため、『ヘルスプロモーション＝健康増進、や『ヘルスプロモーションは人びとが健康になること（疾病予防）をめざす戦略、と理解される人もまだまだ多いと思います。先生が第1回、2回の連載でもふれていらっしゃるように、WHOは「健康は生きる目的ではなく、生活の資源」と述べていますが、この点はヘルスプロモーションを



説明する際に大変重要であると感じております。

島内：ここで、友人である WHO のヘルスプロモーションに関するオタワ憲章とバンコク憲章を創発し、現在もトップランナーとしてけん引している WHO シニア・アドバイザーのイローナ・キックブッシュ博士とシドニー大学教授（元副学長）のドン・ナットビーム博士について、少し語って欲しいのですが……。

鈴木：イローナ博士とナットビーム博士に初めてお会いしたのは私がまだ大学院生のころだと思います。お二方ともにこの領域の重鎮でいらっしゃいますが、専門家のみならず、学生や一般の方々にも大変親しく接して下さり、ヘルスプロモーションに対する情熱とともに、人々を包み込むようなオーラを感じたのが第一印象です。

先生とイローナ博士とのエピソードで特に印象的だったのは、初めて日本を訪れた際に、保健師さんと助産師さんを中心とした地域活動の一つである愛育班活動に大変感動され、その活動のビデオを持ち帰られたというものです。当時の私としては、ヘルスプロモーションを一生懸命学び、研究や現場での活動でいかに展開することが可能かと日々考えておりましたが、先生からこのお話を伺った際には「もうすでに日本の活動のなかに WHO のヘルスプロモーションにつながるものがたくさんあるのでは？」と視点を変えるきっかけになりました。実際に、先生がヨーロッパに留学され、オタワ憲章ができる過程を間近で見た際に「日本の地域保健活動に似ているな…WHOの方が遅れているのでは？」という感覚になったと伺いましたが、いかがでしょうか？

島内：私は1968年に順天堂大学体育学部健康教育専攻に入学しましたが、そのときから健康教育学・ヘルスプロモーションへの歩みが始まったと回顧しています。健康教育専攻の主任教授の山本幹夫先生が、「健康教育が健康獲得の鍵であること」と「健康は学際的研究を必要としている」を熱く語っていたことを思い出します。正直な話ですが、イローナ博士にお会いしたとき、WHOヘルスプロモーションの基本概念と戦略を違和感なく理解できたからです。と同時に、日本ではすでに地域をベースとした愛育班活動を展開していたので、「地域活動の強化」の発想には、東洋の

発想を感じました。

鈴木：ありがとうございます。確かに、日本には以前から専門職のみならず地域住民を巻き込んだ「地域活動の強化」につながる活動がされてきましたよね。私たちはヘルスプロモーションを海外から取り入れたように感じられますが、実は逆輸入といえる部分もあるのかもしれないですね。

次にナットビーム博士ですが、お人柄はイローナ博士と大変似ていらっしゃると思いますが、まさに辞書的な文章力と構成力をお持ちといますか、ヘルスプロモーションの概念的な部分を的確に文字化し、理論やモデルとして「見える化、してくださっている印象です。バンコク憲章が提唱された際に、定義の部分に「人びとの健康とその決定要因をコントロールし～」と健康の決定要因について加筆されましたが、これはナットビーム博士がオタワ憲章のころから人々に届く定義とするために入れるべきでは？というお考えがあったと伺いましたが……。

島内：そうですね。ナットビーム博士は、1986年11月にオタワ憲章が提唱される前の年の1985年7月に「健康の決定要因」の重要性に言及していました。

鈴木：やはりお二人のチームワークは偉大ですね。近年では「健康の決定要因」に関する研究の重要性も高まってきておりますし、HPHとしても注目していかななくてはならない課題であると感じております。Health for Allに向けた WHO の健康戦略は、保健医療を越えた分野の人々との協力が鍵となります。さまざまな学問領域やセッティングズ（生活の場）を越えた活動として、今後も皆さんとともにチャレンジしていきたいですね！

島内：1年間「WHOヘルスプロモーションとは何か？」を連載してきましたが、皆さん、ヘルスプロモーションの概念や戦略についてご理解いただける内容になりましたでしょうか。

皆さんのなかで少しでも「健康づくりは難しいものではない」という感覚や「この活動もヘルスプロモーションでは？」というようなイメージを持っていただけましたら幸いです。鈴木美奈子先生ありがとうございます。これで、対談を終わりたいと思います。